

- 1 日時：2018年8月16日（木）～17日（金）
- 2 場所：東証ホール
- 3 内容の概略

<第一日目> 8月16日

- ・暑い一日となったが、140名を超える先生方が参加した。
- ・主催者挨拶と今回の経済教室の講義の趣旨説明のあと、1時間目の講義がはじまった。

<1時間目> 「Basic 授業づくりの着眼点」（目黒区立東山中学校教諭 三枝利多先生、同志社大学政策学部教授 野間敏克先生）

- ・最初に野間先生より、この講義の趣旨の説明があり、三枝先生の講義となった。
- ・三枝先生は長年の授業づくりの成果である授業案をもとに次のような話をされた。
- ・授業づくりの着眼点としてステップ1では、
  - 1 授業が生徒のためになっているか」を問う。以下、着眼点を6つ（計7つ）あげる。それらは次のようなものである。
  - 2 生徒の興味、関心、意欲を高めるものになっているか、
  - 3 生徒が必然性を感じるのか、
  - 4 生徒が自分の言葉で理解できているのか、
  - 5 教師が学習に対するねらいと観点をもっているか、
  - 6 生徒が自分の所属感や有用感をもてるのか、
  - 7 教師の指導は首尾一貫しているのか、である。

・このような着眼点に到達できたのは、これまでの社会科授業の経験の蓄積があったからである。最初からうまくいったわけではない。新任校で生徒がお義理で付いてくる授業になっているのではという気づきがあり、そこから、授業づくりに本格的にのめりこんだ。その中で生徒の成長と生徒のちらによって開眼した例を7つあげておく。それらは次のような例である。①歴史分野の自由民権運動を扱ったとき（平成2）の生徒の発言、②地理分野で関東地方を扱った時（平成5）の首都圏移転に関するディベートでの生徒の発言、③歴史分野で平安案時代を扱ったとき（平成6）の立場に分けてのパネルディスカッション、④地理分野で東北・北海道を扱った時（平成6）の屋台村方式での発表、⑤歴史的分野で江戸時代を扱ったとき（平成7）の三連続テーマのディベート、⑥公民的分野で国際社会を扱った1月の授業（平成8）でのワークショップ方式での生徒の追究の姿勢、⑦公民的分野を扱ったとき（平成11）の会社づくりの発表会での生徒の発言、である。

・ほかに、自己の社会授業の歴史のなかで、学校外の世界との出会いや、日本の将来の主権者への不安、社会科が背負っている使命に関して考えることが授業づくりにむかうエネルギーとなった。

・ステップ2として、授業づくりの着眼点は以下のようなものである。

・まず、現在の指導要領での授業では、学習指導要領を解釈して授業づくりに活かすことである。それに関して、配布資料の金融・経済教育と現行指導要領の係わりを示した一覧と、生徒に生まれる発問を意識した指導計画（都中社公民専門委員会資料の三枝先生担当

分)の二点をあげておくので見ておいて欲しい。

- ・次に、新学習指導要領を授業づくりに活かす視点として、指導要領の方向性を確認し、それを自分で読み解き、そこから生徒たちに納得させる切り口を見つけ、その切り口を使った授業展開を組み立てることが重要である。
- ・新学習指導要領の方向や趣旨をいかすことができるこれまで開発した授業の例では。①必然性という点で私たちと経済のなかの市場の働きに関する、なぜ銀行や、会社や、議会があるかについて問いかけて考えさせる授業。②分業と交換に着目させる無人島シミュレーションの授業。③希少性に注目させる家計ゲームの授業。④分業と交換に着目させる会社づくりの授業、などがある。
- ・見方・考え方を助ける活動型の授業を有効にするためには、①教師が見通しを持つ、②最初から教え込まない我慢と工夫、③生徒の変容に気づく、④振り返りの授業を大切にする、⑤外部講師を授業に取り入れてみる、⑥授業をパッケージで考えてストーリー性や系統性を工夫する、⑦日常のグループ活動とリンクして生徒の学習活動を組織するという7点が大事である。
- ・これらを考えた具体的な授業例として、①サッカー場の利用を巡る対立と合意、効率と公正の授業、②家計のシミュレーションゲームが資料にあるので参照して欲しい。
- ・最後に結論として、活動型の授業を提案してきたが、最近の小学校の授業の見学を通して改めて講義形式(一斉授業)の大切さを感じている。また、生徒の出口を見通して地理・歴史・公民の一貫した授業づくりを見通すことも大事であると感じている。
- ・そのための授業づくりでは、教師が本を読み、指導の首尾一貫性をもち、凡事徹底を実行し、生徒の非認知能力、市民性の涵養を目指すことが必要。

<野間先生のコメント> (記録なし、野間先生にデータをいただいで起こす必要あり)

質疑

<2 時間目>「中学教科書を使ったエコノミストからの授業提案ー市場の働きと経済ー」  
(福島大学人文社会学群経済経営学類准教授 佐藤英司先生)

- ・中学教科書では、「観光地のホテルや旅館の宿泊代は、お盆や正月にどうして高くなるだろうか」という問いがでている。この答えは、たくさんある。例えば、高い宿泊代でも泊ってくれる人がいるから(需要側の視点)、従業員にボーナスを払う必要があるから(供給側の視点)、食材の調達費用が高くなるから(供給側の視点)など。これらは経済学的にはすべて正しい。このような、様々な視点から考えることは重要だが、教科書の記述が教える側にも学ぶ側にも親切に書かれているわけではない。
  - ・この講義では、教科書の市場の箇所の記述を経済学で読み解くための最小の知識を紹介して、さらに授業での取り組み方に関して提言したい。
- 1 需給曲線に関する記述はどうなっているか
- ・教科書では需給量に関しては、キャベツを事例として扱っている。需要量はある価格の

もとでの買いたいと思う量である。供給量はある価格での売りたいと思う量である。それをグラフにしたのが需給曲線のおなじみのグラフになる。

## 2 需給曲線を考えるための前提は何か

- ところがこのグラフを見て、在庫があるなら価格に関係なく売れるのではとい疑問や、価格にそこまで反応するのという疑問がでてくる。それは、このグラフが様々な仮定の上で成り立っているからだ。
- その仮定には、①プライステーカー、②価格以外の条件が一定、③同質財である、その他がある。順番に説明する。
- ①のプライステーカーとは、買い手や売り手が多数いて、値引き交渉や値上げ交渉の余地がないことである。だから、売り手も買い手も価格に対して需要量や供給量が決まるということになる。もし、独占や寡占のように売り手や買い手が一人だったり少数だったりした場合は、値上げ交渉や値下げ交渉が可能になる。
- 仮定の②の価格以外の条件が一定ということは、逆にもし価格以外の、嗜好や所得や他の財の価格変化があった場合には、その前提が崩れるので、需要曲線がシフト（移動）する。供給曲線がシフトするケースでは技術進歩や生産要素の価格変化などがある。
- 仮定の③の同質材というのは生ビールと発泡酒のようなケースを想定すると理解しやすい。この二つは同じではなく別の市場の商品である。ところがビールとして考える場合は同じ物として考えているということになる。同じ鞆のように見えても、エルメスの鞆とワゴンセールのは違う物である。キャベツのようにおおむね同じ物を想定出来る物で言えば、質が同じであれば量のみで考えることが出来るのである。

## 3 市場均衡の考え方

- これらの前提で作成された需要曲線と供給曲線を重ねたものが教科書に出てくる、はさみのようなグラフになる。もし需要量と供給量のバランスがとれない場合は、価格は上がったたり下がったりしながら、最終的には価格が安定するところに落ち着く。これが市場均衡である。このプロセスは多数の買い手、多数の売り手の行動を市場が左右するように見えるので、アダムスミスはこれを「見えざる手」と称したのである。
- 市場均衡が変化する場合は、価格以外の条件が一定という仮定が破れる場合に発生する。需要が変化したり、供給が変化すると曲線は左右にシフトして、新しい均衡点をもとめて価格と取引量が変化する。
- その関係を問う記述が帝国書院の教科書には正確に書かれているが、このロジックを分かる中学生はほとんどいないのではなかろうか。それは「価格が上昇すると需要量が減少する」という文章と、「需要が減少すると価格が下落する」という文章の違いを正確に説明できるかどうかで分かる。前者は直線上の変化、後者はシフトによる変化である。

## 4 陥りやすい間違いは何か

- 価格の理解で陥りやすい間違いをいくつか紹介しておく。一つは、一物一価の法則であ

る。完全競争市場では同じ財の価格は一つに決まるというのがそれであるが、現実にはほぼ同質材であっても価格が異なることが多い。例えば、ガソリンスタンドの価格設定などがそうであって、これは需要や供給以外に競争する企業戦略などが影響していると考えられる。

- 二番目は、データ、グラフの読み方の例である。ミカンの取引量と平均価格のグラフを提示した。このグラフを見ると需要法則がなりたっているようだが、実はこのドットは均衡価格を示しているのだから、結んで右下がりの需要曲線なるものではない。需要曲線はシフトせず、供給曲線だけがシフトしていると考えられるべきものである。
- 三番目には価格差別の理解がある。冒頭のシーズンのホテル代の高騰、観光地の宿泊代はホテルや旅館が需要に応じて決めている。つまり、彼らはプライステーカーなのである。その場合、旅館やホテルの利潤をできるだけ大きくするためには、異なる消費者に異なる価格設定をする価格差別をしているのである。価格差別では、学生割引の例などがある。
- 教科書で載っているキャベツを潰している写真。豊作貧乏の対応ということである。これは完全競争ではない状態で、農協と政府がプライスメーカーとして生産を調整しているケースである。また、ぶりのように豊漁でも豊作（豊漁）貧乏にならないケースもあり、それは需要曲線の傾きが影響しているのである。
- ここまでの説明をまとめておくと、需給曲線のシフトや需要曲線の傾きを生徒に理解させるには前提を教えるべきでなければならず、具体的・限定的に考えると逆に説明が難しくなるケースが多い。したがって、グラフを使って市場価格を教えるよりも、需要供給は全体的傾向を説明する方が良いと思われる。

## 5 授業実践でのポイント

- 教科書の記述からストーリーづくりをする場合、前提の確認をして、需要曲線の傾きを明確化してゆく必要がある。そうして、現実から理論へのストーリーを作り、理論ではモデルを使って分析規則性を発見させて、それをさらに現実を考察させて説明に使うという循環が求められる。
- また、教科書にある図表を安易に取り入れないことも肝要である。
- 実際の価格、その変化を調べて、教科書の記述と比較対照するというような授業も有効であろう。
- 補足として、東京書籍の教科書にある価格に対する疑問を簡単に説明しておきたい。①昼間と夜間の労働賃金の差は、労働者の供給の差によって説明できる。②前売り券と当日券の価格差は、主催者が需要に応じて決めているからであり、また、異なる消費者に異なる価格設定しているケースである。これは航空運賃の事例の法がわかりやすいのではないかと。③年間を通して価格が変動しないノートや鉛筆の例は需給均衡に達してシフトが起こりにくいケースである。④閉店間際のタイムセールは、超過供給による価格低下である。⑤大型店と小売店の価格差は、大量仕入れによるものであり、具体的な財となると説明がしにくい例である。大型店がプライスメーカーになっているとも説明

できる。

- ・以上、文献を紹介しておくので、それをもとに経済に強い先生になっていただきたい。

## 質疑

### <3時間目>授業提案1「生徒と取り組む価格の働きと金融」（札幌市立西陵中学校教頭 田丸明史先生、上智大学非常勤講師 新井明）

- ・最初に、新井から企画の趣旨の説明があり、田丸先生の授業提案に移った。

#### 1 田丸先生の授業提案

- ・生徒にとって理解しにくい金融を市場経済の学習と接続させて行うために、「わらしべ長者」を使って興味と関心をもたせたい。ストーリーは、わら→みかん→絹の反物→馬→千両（屋敷）というものである。これを経済単元の導入に使う。
- ・最初に、なぜ物々交換が成り立つのかを考えさせる。主人公は「わらしべ」をミカンに交換して得をした。母親の方も「わらしべ」で子どもが泣き止んで助かっている。つまり、お互いのニーズが合致した win-win の関係がここにある。
- ・この時、交換が成立するのは子どもが泣いている時に主人公がそこにいたからである。その点で、取引における「時間」の視点をここからつかむことができる。これは価格のシステムを学ぶ上での大事な視点である。この物語では、タイミング良く交換が行われる、言い換えれば、効率的で公正な取引が行われているのである。
- ・物々交換は、金融の学習の導入としても最適である。現代の物と物の取引では、より効率的で公正的な交換のために貨幣が使われているからである。ここで貨幣に注目させさせるだけでなく、貨幣が使われるようになって世界はどのように変わったのかを考えさせる場面を設定すると良い。そこから広がる市場、進む分業と交換など様々な学習へと発展させることができるからである。
- ・次に、「わらしべ」のなかの反物と馬を交換する場面に注目させる。死にかけた馬を強引に引き取らされてしまった、あなたならこの後どうしますかという問いを生徒に投げ、グループで話し合わせる。生徒からの期待される回答は以下の通りである。医者を呼ぶ、薬を買う、食料を用意する、薬草を探す、あきらめる…である。それらに、ベストの方法はどれだろう、そのための費用をどうしようと問い、最終的に「お金を借りる」といわせたい。そのうえでだれから借りるとよいだらうと問いかける。ここで間接金融の知識を確認する。
- ・元気になった馬を使って、この先、どうやって借金を返してゆくかを問い、生徒にさらに考えさせ「わらしべ〇〇」の形でまとめさせる。例えば、馬を売る「わらしべ商店」、肉を売る「わらしべ畜産」、運送業をいとなむ「わらしべ運輸」などなど。ここでは、金融と起業を関連付け、経済活動や企業に関心をもたせる。
- ・さらに、一年後「わらしべ〇〇」の業績はどうなっているかを問う。無事借金を返済し終わっている、さらに事業を拡大している、借金を返済出来ずにいるなどが出てくるであろう。借金には可能性とリスクがあることに気づければよい。

- また、お金を借りるときには利子をつけて返さなければならないことにも気づかせたい。ここでは、リスクを自分で取るという意味で直接金融についても押しておく。
- まとめとして、お金を借りるとは、未来への投資であり、借金をするということは将来の収入を今受け取るということであること、何かを選ぶということは何かを捨てるという側面（機会費用）があることを金融に関連して理解させたい。
- 最後に、この授業の流れの全体像と小学校、地理、歴史などの他教科、公民科でのその他の部分での学習項目、さらに高等学校での学習など全体にふれた単元構造図を配布した。小中高のそれぞれの段階の学習項目を関連付け、生徒の学びの連続性を意識した授業づくりを行う上で、ぜひとも参照して欲しい。

## 2 新井のコメント

- 金融学習には指導要領、教科書、生徒の興味関心、教員の理解度など多くの課題があるが、今回の提案は、札幌部会の先生方の協力で素晴らしい教案ができたのではないかな。
- 現行指導要領、新学習指導要領での金融の扱い、現行の三冊の教科書の比較分析からは、指導要領で触れていない日本銀行の金融政策や信用創造などまで扱われていることが分かった。また、どの教科書も一貫したストーリーをもって記述しているわけでない。
- その上で、金融を考えるポイントとして、高校の教科書には掲載されている金融フローの循環図が、ミクロとマクロ経済さらには国際経済の全体の流れの理解に有効である。また、中学校における金融学習では、金融現象を、①貨幣に関する学習、②金融の本質に関する学習、③金融システムに関する学習、④マクロの金融政策に関する学習、⑤コーポレートファイナンスに関する学習、⑥パーソナルファイナンスに関する学習の6つの分野に区分けして学習することが必要である。それを踏まえて、次のような提案をしたい。
- 一つは取引と貨幣に関するストーリー、二つ目は金融と貨幣に関するストーリー、三つ目は貨幣の機能から金融政策にひろがるストーリーである。⑤のコーポレートファイナンスは、適切な事例がない場合は無理に金融で行わないことも考えられる。⑥のパーソナルファイナンスに関しては、家庭科との連携を考えることがあっても良いのではないかな。
- まとめとしては、「わらしべ長者」に関する授業提案に関して、取引と貨幣、金融と貨幣、コーポレートファイナンスに関する見事な教材であり、札幌地区で使われている東京書籍の教科書の記述を踏まえた現実性のある授業提案なので、それぞれの場で工夫して利用すると良いと思う。

## 質疑

<4 時間目>授業提案 2「社会的見方・考え方を働かせた授業」（足立区立第四中学校教諭 山田勝之先生）コメント：篠原総一先生

授業提案 2「分業と交換の視点を取り入れた授業」（広島大学附属中・高等学校教諭 阿部哲久先生）コメント：篠原総一先生

### 1 山田先生の授業提案

- ・証券業協会が提供する「株式会社をつくろう！～ミスターX からの挑戦状～」を活用した授業を紹介する。
- ・この授業は、6 時間配当の授業プランで、そのなかで主体的かつ活動的で楽しい授業づくりの例をして提案したい。実践した足立第四中学は、アクティブラーニングの取組みを全校で行っている。生徒の自立を目指し、考えさせる・答えを持つ指導に取り組んでいる。公民の授業では、模擬裁判、区長になろう、会社をつくろう、模擬国際会議などがそれにあたる。
- ・授業づくりのポイントは、生徒が調べ、話あい、考え、そして発表するというプロセスをたどることで、思考力、判断力、表現力を育てたいということである。授業計画は以下のような 6 時間配当である。
  - 1 時間目：企画「魅力ある会社を企画せよ」企画書を準備する
  - 2 時間目：企画「資金を集めるための授業計画を立てる」この時には、利潤が追求できるか、社会貢献を考えているかの二点を抑えるようにしている。
  - 3 時間目：プレゼンテーションの準備
  - 4 時間目：プレゼンテーション「株式を発行して資金を集める」この時は公開授業としてポスターセッション方式のものとして、プレゼンテーション後に応援したい企業に投資をする。
  - 5 時間目：投資「経済の動きを見極めよ」円高・円安や景気などの知識を確認する
  - 6 時間目：企画「求人票をつくろう」労働問題の学習とリンクする。提出された求人票は冊子にして学習成果として残す。
- ・生徒はこの授業を通して体験的に経済、投資、会社などについての理解が深まったと評価している。また、さらに疑問に思ったことなどから、さらに問いを深める姿勢を示している。

### 2 阿部先生の授業提案

- ・新たに指導要領に入った「分業と交換」については比較優位の考え方を扱うのが良いのではないかと。それによって、生徒の多くが「得をしている人がいれば、必ずその裏で損をしている人がいる」と考えており、社会福祉などについて当事者の立場で考える妨げになっている、という現状を変えることができると期待している。
- ・そこで、この考え方が違っているということを理解させるためのストーリーを考えた。
- ・第一のストーリーは、「あるバイト」の話である。これはのし袋を作るバイトで、あなたは袋をつくるのは得意で 1 時間に 20 枚、文字を書くのは苦手で 10 枚が精一杯。それに対して、花子さんは、袋をつくるのは 1 時間に 20 枚、文字を書くのは 15 枚書ける。
- ・さて二人は交換しようと考えた。次の日、あなたは 1 時間で作った袋 20 枚をもって花子さんのところにゆき、それと引き換えに自分なら 1 時間で 10 枚しか作れないはずの文字

入り袋を 13 枚持って帰った。あなたは得をした。では花子さんは？ 花子さんは、1 時間かけて 15 枚書ける文字を 13 枚分で、袋 20 枚を得ることができた。この話で、交換で両者とも得をしていることが理解できる。

- なぜそんなことが起こるのか、それを考えるために第二のストーリーを提示する。論文と証明の交換である。あなたは論文なら 1 時間に 5 問、証明なら 10 問解ける。花子さんは、論文なら 10 問、証明は 5 問解ける。論文と証明各 10 問の宿題が出され、2 人とも 3 時間かかるはずだが、帰宅時間までの 2 時間で終わらせたい。二人はどうしたか？あなたは 2 時間ずっと証明を解く、20 問が仕上がる。花子は 2 時間ずっと論文を解く。論文 20 問が仕上がる。半分ずつ交換しよう。2 時間で 3 時間かかるはずの宿題が終わっている。これを図にしてみよう。(図は省略)
- さらに交換の第四のストーリーを考える。花子は事故にあってけがをして 1 時間に証明 1 問、論文 2 問しか解けなくなってしまった。塾で会った二人、前のように交換ができるか？
- 図にしてみると、花子の論文 1 問とあなたの証明 1 問を交換。そうすると、二人とも一人では出来なかったはずの問題が手に入る。どんなに条件が悪くとも交換することで両者が得をしている。
- このように、二人は自分が得になるような交換をしているだけなのに、分業と交換によって社会全体の生産が増えて、二人の暮らしが豊かになる。つまりいろいろな人が協力し、交換しあえば、全員がたくさんのものを手に入れることができる。この場合、完全特化しなくともそれが可能になる。
- 高校の教科書ではこれまでも比較優位が扱われており、リカードの数値例で貿易の利益を説明し、その時には完全特化の事例にしているが、それは必要ないということになる。
- ここから重要な知見が生まれる。つまり、自給自足の 10 人の社会より、分業と交換をしている 10 人の社会の方が豊かになるということであり、交換に参加する人はどんな人でもよいということである。したがって、例えば、障がいがあって作業のスピードが遅い人でも社会に参加すれば社会にプラスになるということである。
- ここまで学んで生徒には、分業と交換で社会を改善する方法を考えようという問いを班で行わせる。
- この授業の結果は、内容を理解し見方が変わったという生徒が多かったが、一部の生徒は理屈で理解した後も、「だまされている気がする」など感覚的な抵抗感を維持していた。比較優位のような妥当性が高い理論でも、「である」と「べき」は慎重に区別しておくことが必要である。また、感覚的な抵抗を和らげるには、三国丘高校の大塚雅之先生が実践している比較優位を体感できるゲームを平行して行わせることが有効かもしれない。大塚先生のゲームの資料を添付しておくので参照して欲しい。

### 3 篠原先生のコメント



## 2日目 8月10日(金)

- ・昨日にくらべやや涼しくなった一日となった。本日も多くの参加者を得て、第二日が開始された。

### <1時間目>「東証の金融経済教育への取組み」(東京証券取引所金融リテラシーサポート部 岡部ちはる氏)

- ・岡部氏の自己紹介からはじまり、東証の紹介、東証の金融経済教育の取組み、実践例の紹介と資料もちいて解説があった。この部分は、東証のHPや高校の記録を参照していただきたい。
- ・メインの発表は、現在開発中の「会社を知ろう、会社を応援しよう」という教材の概要説明と協力依頼の部分である。
- ・この教材は、中学校の経済の授業の導入として使うことを想定して、「会社の目的と役割」「会社を応援する」「会社と社会の動きの関係」を学ぶ導入として先生がこれを使って授業を進めることを前提とした教材である。教科書の内容に入る前の簡単な導入教材として、4人程度のグループに分かれて話あい、発表することを想定している。
- ・実施時間は20分、動画での説明を流しながら行い、ワークシートに記入しながら、教科書形成のキーワードを確認、理解できるようにしている。
- ・この教材は、二つのパートからなり、一つは「会社を知ろう」パートである。AからHの8つの業種選択カードから無作為に選ばれることから始まる。それぞれの業種には、4枚の事業プランカードが用意されており、そのなかでどれが最も魅力的な事業かをグループで話し合わせるのが第一段階である。
- ・続いて、「会社を応援しよう」パートになる。各グループが提示した事業プランを評価して、より応援したい企業に花丸をつけてゆく。それが済んだあと、社会情勢の変化やビッグイベント発生動画が流れて、その影響を踏まえて花丸の数を変化させてゆく。そして最終的に一番花丸が多い事業が選ばれる。この二つの活動から発見できた内容をワークシートに記入して、一連の学習が終わり、教科書の内容に移行するという流れである。
- ・この教材が中学生にとってレベルが高いかを岡部氏が参加の先生方に聞いたところ、約4分の1程度の方が、レベルが高いに手を上げていた。また、逆にこれなら大丈夫という方も同程度いて、さらに改良工夫をすることで、実際に活用できる教材になってゆくことが見通せたといえるだろう。
- ・また、提示した業種が適当であるかも参加の先生方に聞いたところ、導入教材としては生徒がイメージしやすいB to C寄りのものがわかりやすい、という意見も、B to B寄りの企業や第一次産業も取り入れるべき、との意見もあった。
- ・開発中の教材を提示して、現場の先生方の意見をモニターしてゆくことは、夏の教室では初めての試みであったが、教材開発の試みとして現場との対話を重視する姿勢を打ち出した発表であった。

<2 時間目> 「エコノミストと経済の授業をつくる<働くことの意味―「働き方改革」を考える―>」(京都府立園部高等学校・附属中学校教諭 中山義基先生、慶應義塾大学商学部教授 加藤一誠先生)

1 中山先生からの自己紹介のあと、授業実践の紹介に入った。

- ・実施校は、園部高校の附属中学3年生。中山先生は、本年度3年生を教えていないので、特設での投げ込み型の1時間の授業である。
- ・授業の流れは以下のようなものである。  
導入で「あなたは何歳まで働きたいと思うか」を問い、ワークシートに記入させる。その上で、日本の将来推計人口のグラフ、日本の高齢化率の将来推計のグラフを提示する。そのグラフを読み解かせながら、「将来どのような社会で働くことになりそうか」を問うてゆく。
- ・人口減少、少子高齢化の社会で働くことになることを確認したのちに、さらに人工知能(AI)が登場するような社会で働くことになることを紹介する。そして、AIと対決するのか、共生するのかを問題提起しておく。
- ・次に展開として、労働力が減少するとどのようなことが発生するかを問い、企業の生産活動が低下し、利潤が低下する可能性がでて、GDPも減少する可能性を示唆する。そこで、生産性を低下させないために、労働力をどうすればよいかを考えさせる。その手がかりとして男性の労働力率の推移のグラフを提示する。  
そこから、60歳以降に急激に労働力率が下がることを読み取らせる。(女性の労働力率のグラフも提示するが、今回は取り上げない。
- ・高齢者の労働力率の低下に関連して、今後も収入を伴う仕事を続けたいという答えた人の割合の国際比較のグラフを提示して、日本では高齢者の働く意欲が低下していないことを押える。そして「働きたいと思っている高齢者が多いにもかかわらず、働いている高齢者が少ないのはなぜか」を問い、さらに「高齢者が働くことによって、社会にどのような影響があるか」をグループで話し合わせる。
- ・さらに、高齢者が働きやすい雇用環境を創るために「働き方改革」が行われていることを紹介し、将来どのようなことを意識して働く空間(場所、環境)を創ってゆけばよいかをロールプレイで考えさせる。
- ・ロールプレイは、5人のハンディをもっている人たち(シングルマザー、身体障害者手帳を持っている人、定年退職をした元会社員、フィリピンから働きに来た男性、トランスジェンダーの男性)をあげて、それらの人たちの環境や願いを書いたものを各人が読むという形をとる。
- ・それを終えた後に、あらためて、高齢者がなぜ働いた方がよいかを問い、さらにまとめとして、「あなたはなぜはたらくか」「どのようにはたらきたいか」を問うて終了する。
- ・生徒は、この授業を真摯にうけとめて、多くの反応が寄せられたとのことである。なお、説明の途中で授業の風景が映像として投影されて、提案授業の雰囲気、生徒の発言の様

子などが提示された。

## 2 加藤先生のコメント

- 中山先生の授業の背景となった日本の状況を説明する。  
内容は、相対的に高い高齢者の労働意欲をさらにひきあげるための方策、定年の引き上げと年金支給開始年齢の引き上げとの関係、今後の高齢者労働のゆくえの三つである。
- 一番目の高齢者の労働参加では、国際比較をすると日本ではすでに高齢者の労働力率は上昇している。高齢者は収入が欲しいから働きたいと考えているが、現実には非正規労働者として働いている、希望としては非正規でもよいからあまりたくさん働きたくはないがお金はちょっと欲しいというのが本音のところであることがデータから読み取れる。
- そのような高齢者が働く受け皿として自営業が減っていて、パートが増えている。パートやアルバイトのまま年金受給年齢を引き上げることはそれでよいか疑問が残る。
- 高齢者の労働参加に関しては、意識をどうするか、働き方をどうするかという両面から考える必要があり、年金年齢支給の引き上げだけでは解決しない問題であり、制度設計全体を考える必要がある問題である。

<3時間目>『ウソッ！ホント』授業の作り方ー「日常の話題から“経済概念”を素材として」(立命館大学非常勤講師 河原和之先生、千葉県立津田沼高等学校教諭 杉田孝之先生)

### 1 河原先生の授業提案

- 自己紹介のあと、サブタイトルの経済概念の学習の留意点から話を始められた。
- 新学習指導要領では対立と合意、効率と公正に加えて分業と交換、希少性などの概念が登場している。それらの概念を学ぶ場合は、学習意欲を喚起する身近な事例から「見方・考え方」「経済概念」を育てたい。その事例としては、100円均一ショップ、甲子園のビールのブランドなどがある。
- インフレーションに関しては、ハイパーインフレの時の事例から常識をひっくり返す問いを投げかけ、その上で認識を揺らす問いを応用問題で出して、概念を定着させる。
- 希少性でも同じで、空気がただでない場所を考えさせたり、土砂降りの夕立の時の傘から希少性に気づかせ、グループで希少性の具体例をたくさん上げさせ、深夜のタクシー料金がなぜ高いのかという応用問題を考えさせる。さらに、「水ストレス」を希少性という概念から考えさせるという流れの授業を行う。
- 機会費用に関しても、高い料金を払って近鉄特急に乗る理由や、高い自販機のジュースを買う理由を考えさせ、グループで機会費用の具体例をあげさせ、応用問題でスカイツリーの展望台の料金の秘密を考えさせる。そして、配車タクシーの料金が高いわけを考えさせるという流れで、概念を理解し、定着させ、活用させる方式をとる。

- ・これらの学習では、問いは知識を問うのではなく、どんな生徒でも発言できる、間違っても構わないという形での問いにしておくこと、ユニバーサル授業となっていることが大事である。また、日常の事例から概念を習得し、その概念を活用し、他の事象や社会的諸課題を分析・探究するという流れで学ぶことが大切であり、丁度数学の学習で基礎問題から応用問題を解く感覚をイメージするとわかりやすい。
- ・ここで、私の授業の映像があるので、それで具体的にイメージしてもらえると有り難い。(NHK取材の映像を流す)
- ・最後に効率と公正に関する授業例を紹介する。この授業では、リアルタイムの教材として国道425線の写真を見せここはどこかと問い、このような「酷道」を放置してもよいかを新聞記事読ませ、効率と公正の観点から分析させ、この問題を解決する方法を対立から合意の観点から提案させるという流れの授業である。
- ・最後に、「見方・考え方」の中心軸である概念形成は、資質・能力そのものであり、ここで学んだことが他の学習に転移する学力である。知識はわすれても、知らないうちに使えることが概念学習であることを強調したい。
- ・また、「ウソッ！ホント！のネタ」とは、驚きや葛藤のあるネタ、矛盾や対立のあるネタ、切り口が単純でも深い学びがあるネタ、日常生活から科学の世界にせまるネタ、はやくわかりたい解決したいと思うネタ、わくわく感があるなかで分かってくるネタ、思考や判断が揺れるネタなどなど、である。このようなネタを発見できたら、すべての生徒が生き生き学び、わかる授業となり、学力差を超える逆転した授業が可能となり、子どもの視点と教師の視点が統一した授業が可能になるということを伝えておきたい。

## 2 杉田先生からの質問と回答

Q1：先生はどんな生徒を育てたいと考えているか？

A：初任の時の生徒の言葉「ちゃんと聞かせたいならもっと面白い授業をしろ」と言われ反抗されました。まず、社会科が楽しい、好きになる生徒を育てたい。欲をいえば、「世の中は複雑だなあ、難しいけれどももう少し考えてみるか」という生徒が育てば良いと考えている。そのためには、生徒が間違っても、どんどん意見を言おうという問いしか出さない、教科書に掲載している発問はしないようにしている。

Q2：学習指導要領を意識しているか？

A：現場にいたときはあまり読まなかった。大学で教えるようになりきっちり読むようになった。そして意外と良く出来ていることを発見。それから読むだけではなく、学生と議論もしている。新学習指導要領では、理解・考察だけではなく、構想までできるようにと書かれている。挑戦しがいがある。例えば、DVDで流したコンビニの授業では、未来型コンビニの絵を描く構想型授業を試みた。カスピ海の学習では海か湖かで領土が変わる。こんな事例として考察から構想までの授業ができるのではと思っている。

Q3：概念学習は日常からはじめないといけないか？

A：いけないわけではないが、そのほうが理解しやすく、子どもも食いつく。

Q4：ネタはどこからでてくるのか？

A：街で発見したネタもある。例えば「元カレよりニューカレ」というポスターを見たときに「使える！」と思った。また、本をたくさん読み、その中から発見することもある。新書1冊からなら4つや5つのネタは発見できる。出てきたネタを1年かけて練り上げる。ネット検索でネタは探さない。ネットは事実の確認だけに使っている。

Q5：ネタの要素が7つあるが優先順位はどれか？

A：切り口が斬新でひろがりがあるものが一番かと思う。例えば、日本酒がない県が三つあるのはどこかという問いなどがそれになる。答えは、沖縄、宮崎、鹿児島。これは自然と農業の問題でもあるが、江戸時代の吉宗のコメ政策にまで広がる。切り口は単純だけれど、深く広がるネタである。

Q6：授業の流れを重視するか？ 教科書との関わりは？

A：教科書を離れたネタはダメ。有名な有田和正先生の「大名行列のトイレ」の実践は残念ながら雑学でしかない。教科書とのつながりが見えるような形でのオチがあるから生徒はついてくる。テストで点をとって、それで好きになる。ネタは教科書とリンクさせなければ意味がない。

Q7：「酷道」の事例を扱うときのポイントは？

A：効率と公正は授業のすべての場面で扱うが、効率の定義は難しい。だから、具体例を通して考えさせる。今まで使った事例では、琵琶湖にある沖島の例がある。人口300人の島にどれだけのお金をかけるのか、いろいろ議論ができる。分析の基準から考えて問題を考えさせる事例である。

Q8：講義型の授業と活動型の授業の関係をどう考えているか？

A：講義型の授業も大事だと思っている。対話、問いを繰り返すなかでの定着を目指している。参考になるのがNHKの「ちこちゃんに叱られる」である。「東大王」などの知識量を問うクイズ番組ではなく「なぜ337拍子なの？」「プールに入ると目が赤くなるの？」など、日常を題材に、「だれもが一言いいたい」「早く知りたい」という課題を与え考察する授業の典型だ。

<4時間目> 「防災を地理から考える」(立命館大学大学院文学研究科地理学専修教授 河原典史先生、慶應義塾大学商学部教授 加藤一誠先生)

1 加藤先生の講義「防災を経済から考える～関東の治水～」

- ・まず、経済学的判断は基本的に効率性に基づくこと、現実の経済政策では、公平・公正に加えて安全が考慮される、効率は民間で政府は公正・公平を担うという考え方で良いかどうか、政府も効率を考える必要があるという三点を最初にお伝えしておきたい。具体的事例では、今回は生産要素のなかの土地に注目して荒川の防災を取り上げ、最後に政策の限界について述べておきたい。
- ・政府が経済で登場するのは市場の失敗がある故である。それを高校の教科書ではどう取り上げているかをまず紹介しておく。なぜ市場の失敗が防災で起こるのか。それは、も

し市場にまかせれば堤防を作るということは賛成だが、では誰かが負担しなければならなくなったときにはフリーライダーが発生したり、論争が起き、結果としては安上がりで小さく弱い堤防しかできない可能性が大きいからである。対策として、政府が強度をしめして作る必要がある。

- 以下、荒川を事例に紹介する。荒川の位置は図の通りである。埼玉県から東京に流れる主要河川である。荒川整備はダムや調整池など整備が進んできてはいる。特に、荒川第一調節池は重要である。このように荒川の整備がされてきているのは過去に何度も災害にあっているからである。そのために大規模な改修では荒川放水路の建設がある。
- 経済学的に見た治水の意義は、江戸時代は農業のできる土地の拡大である。現代で安心して暮らせる土地＝経済活動の確保ということがある。
- 荒川の防災事業のなかでの事業評価のプロセスに触れたい。事業評価は計画段階、事業実施段階、供用段階とそれぞれの段階で行われてゆく。特に計画から実施に移るときには費用便益計算を行い、それに合格した事業だけが実施することになっている。また、事業の進捗がないなど事業の変更がなされることもある。
- 荒川では、洪水浸水層的区域を割り出し、そこから事業を展開している。事業評価の流れは便益をあげて、純便益を計算し、費用では総費用を計算し、費用対効果の算出をする。詳しくは資料を見ておいて欲しい。また、建設が長期にわたるので時間割引が必要にもなる。
- ここまでの説明でおわかりのように、公共事業はあまり評判がよくないが、効率性を考慮して事業を行っていて、民が効率、官が非効率とは限らないことを知っておいて欲しい。

## 2 河原典史先生の講義「防災を経済と地理から考える (2)」

- まず地理学の考え方から説明する。地理学では地域の様子を知ることから始まるが、事例結果を覚えることではない。これを強調したい。空間と時間から地域の様子を考えるのが地理学である。その場合は、空間スケールを大陸、国、地方、都道府県、郡、市町村と変えて見てゆく必要がある。都道府県といっても、静岡県が伊豆、駿河、遠江と三つの国からできているようにそれぞれ違う地域であることにも注意したい。そのなかで一番基本になるのは、ムラ（大字、藩政ムラ、集落）である。
- また、空間と時間から地域の変化を考えることも大事である。つまり時間のスケールを変えることである。これは歴史地理学の対象となる。土地利用の変化、年周性、月周性、日週性と時間による土地利用や経済活動の変化が読み取れるはずである。
- テーマとなっている防災に関しては、京都の八幡市を事例にしたい。ここは木津川と宇治川、桂川の合流点の場所の近くである。2万5000分の1の地図と2500分の1の国土基本図の二枚からこの土地の洪水と微地形の関係をみってみる。
- 八幡市は木津川の向こう側に飛び地をもっている。これはかつて木津川がここをながれ

ていたことの痕跡である。また、洪水による土砂が堆積し、洪水でも安全な微高地が形成されて、畑（果樹園）や宅地、寺院などがある。自然堤防の周辺は低湿地で水田であったが、高度成長期に宅地開発されているが、旧河川の流路変更によって河川跡が道路になって宅地の間を通っている。

- また、地図の南側に環濠集落であった地区がある。その周囲の田は、いまは圃場整備がされているが、昔はばらばらだったはず。また、用水には堰がある（トトロで登場する世界）。地図と現地調査でこのような土地の様子がわかる。
- このような地域を知るには、5万分の1の地形図、2万5000分の1の地形図、1500分の1の住宅地図など、スケールを変えた地図を用意し、旧版の地形図との比較による地域変化の読解が必要になる。
- 空間スケールの変化による地域性の読解にはGoogle mapやGoogle Earthが使えるが、比高が不明瞭だったり、植生がわかるが農業的土地利用が分かるかどうか分からないなどの問題もある。一番は今回のような2500分の1の国土基本図の読解をするとよい。
- 屋根色に注目して防災について考えることもできる。開発は後背湿地や旧河道に位置する安価な下田の売却からはじまる。工場用地、学校・病院などの大型公共施設の場所にも注意をはらいたい。また、屋根瓦について言えば、その色で住宅開発の歴史やその地域の特色がわかる。そこから、防災に関する予防措置、対策が考える必要が出てくることが分かる。
- 土地の履歴に関しては、地名、空中写真である程度判定が付く。また、路線価を知り、地籍資料（地籍図と土地台帳）からも履歴が分かる。
- 自然と人間を考えるには、地域の時間と空間を「タテ糸とヨコ糸」から見ると良い。つまり、地域の変化を考え、スケールを変えて考えることが必要である。「地理総合」が必修化されるが、GIS（地理情報システム）の学習を通して地理的な考え方から防災・減災を学ぶことになる。それについてはまたチャンスがあれば話したい。

以上の記録、文責：新井